



## 主な内容

歯科医師獨協会が発足しました	池松武直	(1)
6月16日(土) 総会・懇親会開催		(2)
日独交流史	酒井 府	(3)
1万2千字(以上)の冒険—研究論文から WORKS へ	柳本 博	(7)
全国中学校大会・関東高校大会に出場～スキー部は、復活～	窪田 潤	(8)
神原駿太郎君「もっと明鏡」大賞 最優秀作品賞受賞!	齋藤有子	(9)
南三陸町へのコンテナハウスの寄贈について	鳥山靖弥	(10)
スキー部の活動紹介および雪上に残ったOB達	宮地健次	(11)
獨協中学・高等学校柔道部OB会ご紹介	高田正道	(12)
ドイツ語人生た	大沼伸一	(14)
第5代獨協学園同窓会会長鈴木浩先生百歳を記念してお祝い致しました	佐藤明德	(14)
私の近況 卒後十年		(15)
クラス会だより		(15)
獨協中学・高等学校PTAより「獨協祭・バザー用品ご寄付のお願い」	鈴木一郎	(17)
学園だより		(18)
平成24年度大学別合格者数		(18)
図書館だより		(19)
平成23年度 会費納入にご協力をありがとうございました		(19)
平成24年度 獨協祭が開催されます		(20)
物故者名簿		(20)
編集後記		(20)

<http://www.dokkyo-mejiro.com>

獨協同窓会 検索



題字・天野貞祐

第78号

平成24年5月20日発行

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口3-8-1

TEL / FAX 03 (3946) 6352 (直通)

獨協同窓会 発行責任者 鈴木 莊太郎

# 歯科医師獨協会が発足しました

昭和42年卒 池松武直

新入学生を迎えられた学園の「未来に希望」がまた前進されたことは誠にありがとうございます。

今まさに目白台が春爛漫というこの時期に、私たち獨協学園のOBから成る、全国歯科医師の集う会「歯科医師獨協会」が長きにわたる念願が叶い漸く設立・発足を致しました。これは一重に、獨協学園校長・渡辺和雄先生はじめ同窓会会長・鈴木莊太郎先生また学園関係者の皆様方、そして先輩格である「獨協ドクターズクラブ」の会長・伊藤公一先生及び同副会長の谷田貝茂雄先生他多くの皆様方の多大なるご支援ご尽力を戴きましたお陰でございます事を先ずお礼を申し上げます。

多くの医師・歯科医師を輩出してきております獨協

学園には医師である同窓の団体「獨協ドクターズクラブ」が存在しており、同窓の医師の親睦活動や学園児に対する医療啓蒙活動を行っておられます。そこで我々歯科医師も同業の同窓の親睦及び歯科界を目指す後進達の育成の一助とすべく設立準備会を進めてまいりました。その様な中、去る3月4日(日曜日)午後1時から市ヶ谷のアルカディアにて「歯科医師獨協会設立集会」を開催させて頂きました。

設立にあたり「歯科医師獨協会」の筆頭顧問には元参議院議員、元日本歯科医師会会長、そして元日本歯科大学学長であられた中原爽先生(S29年卒)にご就任を戴きました。また、第一回代表には東京歯科大学ご出身の森田芳和先生(S41年卒)にご尽力を戴きました。

設立に至るまでの経緯と致しまして、二年程前になりますが、森田先生が長年に渡る多くのお声をバックに音頭を取って下さることになり、その後何回かの設立準備委員会を行ってまいりました。準備委員会には日本大学歯学部独協会・滝川国勝先生(S32年卒)、世話人の加藤隆久先生(S48年卒)、東京歯科大学独協会・山本啓介先生(S27年卒)、日本歯科大学教授荻原和彦先生(S35年卒)、同独協会世話人の岩淵法一先生(S51年卒)、昭和大学歯学部独協会・三浦健二先生(S51年卒)、また獨協大学同窓会からは中村昭美様(S41年卒)そして小生日本歯科大学・池松武直(S42年卒)が加わり進めてまいりました。

準備委員会中はタイムスリップしたかのように、歴史ある獨協学園の哲学的匂いが染みついた(いわゆる獨協カラーが一目でわかる)雰囲気、少々脱線しな



がらも楽しく和やかに、時には「ローレライ」のメロディーに酔って準備をして参りました。準備会が進むにつれ、吾等の獨協学園に対する思いはそれぞれのノスタルジーを胸に、まさに「獨協・天野イズム」の教えの一つである「過去に感謝」が髣髴とし、同時に、この吾等の歯科大学教育における「現在に信頼」をモットーに歯科医療の素晴らしさを再確認し、また、これからの時代を担う獨協学園の若き学生諸君には吾等の素晴らしき歯科医療の「未来に希望」をお伝えしていかねばと、使命感に似たような熱い思いを加速させて当日に至りました。

今後まだまだ多くの各歯科大学の獨協学園OBの（歯科大学生を含めた）諸先生方に、さらなるご理解とご協力を戴き連携をさせて戴く事が不可欠でございますので宜しくお願いを申しあげます。獨協学園は日本で最も多くの歯科医師を輩出して参りました唯一の学校であります。是非とも共に素晴らしき獨協カラーを発揮させて戴き、「デンタル・スクラム」を組む事にご協力を賜りたいと願う次第でございます。

準備会を重ねるにつれ、吾等は獨協学園児の様に再び「目白台の学び舎」に帰ってきた錯覚さえ覚えました。余談ではありますが、椿山荘・カテドラル教会に隣接した歴史ある「獨協学園」は吾等の心の中に深く刻まれていたことも確認しつつ、目白駅から川村学園、日本女子大学の前の通りをわざわざ歩いたり、日本女子大行きスクールバスに乗り途中下車通学した思い出、「若きウエイテルの悩み」風の話題などを力にして「歯科医師独協会発足集会」の今日にまで至りました。10年ほど前に新校舎となり、時代と共に「学びの丘・目白台」もだいぶ様変わりはしましたが、今まさに「獨協学園と歯科大学」はここにありと意気盛んであります。

天野貞祐先生に直接学んだ時代の同窓が多いため

もございますが、その誇り高き我が母校・獨協学園の「天野教育理念」に支えられてきました。また、天野先生の教えの一つである「現在に信頼」を21世紀の形に相応しい新しい教育理念が「ビオトープ」にあると思います。「ビオトープ：自然（人類と他の生物）との共存」は前学園校長・永井伸一先生が情熱をもって長年掲げて構築されました。永井先生は獨協のルネッサンスとも言うべき時代を変革再生されました。私見ですが、我々歯科医療界は「健康」という面から役割は大きく、そして素晴らしい業界であります。歯科医療界は風評に囚われる事なく変革再生をして行く上で「ビオトープ精神」の中にヒントがあるように思います。

「歯科医師独協会」はその「獨協精神」と「歯科医療」の架け橋になればと僣越ながら思っております。私たち歯科医師も「独協ドクターズクラブ」を見習い獨協の伝統である精神および医療教育に貢献できましたら幸いです。天野先生の教えに「自由の不自由」：（人間は、何かの「枠・ルール」があってこそ自由な身におかれるのであり、逆に何でも好き勝手に振る舞う事「枠のない事は」返って不自由な身である。）がございませう。

私たちは大変幸せな事に「獨協学園・獨協カラー」そして「歯科医師」と言う素晴らしい共通の学問と医療行為の「同窓の枠」を共有しております。このような歯科医師という「素晴らしい枠」を与えられておりますことは誠に幸せな事であると思いつくづき思いながらここに「歯科医師獨協会発足」のご報告をさせて戴きます。過去に感謝 現在に信頼 未来に希望 そして自由の不自由を旨に。

末筆ながら歯科時報新社 吉田泰行様のご協力に感謝申し上げます。

## 6月16日(土) 総会・懇親会開催

今年度の総会は、下記のご案内のように平成24年6月16日(土)に開催されます。総会付議事項につきましては、別紙レジメ(通常総会議案書)にてご確認ください。

また、総会後は、例年通り「椿山荘」にて懇親会が開催され、毎年3月の定期演奏会で好評の母校・吹奏楽部による小編成パフォーマンス演奏も行われます。恩師、旧友も多数参加されますので、奮ってご参加下さいませよう宜しくお願ひ申し上げます。

### 総会・懇親会のご案内

開催日時：平成24年6月16日(土)

場所・時間：総会 会場：獨協中学・高等学校 小講堂

受付開始：午後4時30分

開始時刻：午後5時

懇親会 会場：椿山荘・ギャラクシー

受付開始：午後6時より

開始時刻：午後6時30分

懇親会費：(会場受付でお支払い下さい。)

昭和25年以前の卒業生……………無料

昭和26年～平成18年の卒業生…5,000円

平成19年～平成23年の卒業生…2,000円

平成24年の卒業生……………無料

◇総会・懇親会の出欠につきましては、同封のご回答用紙に必要事項をご記入の上、返信用封筒に封入して、6月8日までに必着するようにご返送ください。

# 日独交流史

昭和 28 年卒 酒 井 府

日独交流史の嚆矢は何かと考える時、ドイツ南部、ミュンヒェン西部の Ulm より 1614 年に来日したと云われるドイツ人 Michael Hohreiter (1591 ~)、次に 1625 年三月末来日の Christoph Carl Fernberger はさて置き、Hans Wolfgang Braun (1609 ~) を挙げざるを得ないであろう。彼は 17 世紀のドイツの砲術者でオランダ船ブレダム号の砲手として 1637、8 年頃来航し、幕府の命令によりオランダ平戸商館長 F. Caron の命を受け、1639 年平戸で臼砲三門を鑄造し、江戸で 6 月 21 日試射を行い、又日本人に火砲操作法を教授し、銀 25 枚の賞金を受けた。日本製砲史の開祖である。一方 1639 年に日本が鎖国状態に入ってから以来、公式にはオランダ人のみが長崎の出島に滞在した以外、外国人は日本に入国出来なかったのは周知の事実であった。従って当時未だ統一には遙かに遠かった現ドイツ地域のドイツ語を母国語とするドイツ人が公式に来日した記録は無い。しかしドイツ人がオランダ人と云う名称の下に訪日した事実がある。その 1 人がいわゆるカスパー流外科を伝えたカスパー (Schaemburger Caspar) ( ~ 1706) であり、オランダ東インド会社の医師として 1649 年来日している。カスパーはオランダ人になりすましたと思われ、1649 年、三代将軍家光、病の時、10 ヶ月江戸城に引き留められ看病したと言われており、翌 1650 年にはオランダ商館長と共に江戸に上り、六ヶ月滞在し、西洋美術、とりわけ外科を日本の医師達に教えた。事実それを伝授された猪俣伝兵衛、山口三郎等が居る。実は近世日本洋学の華蘭学の中心を占めた医学は実質的にはドイツ医学だったと云われている。彼は 1706 年ライプツイヒで亡くなっている。

その様な意味で次に挙げるべきはあのケンペルと云われている Engelbert Kampf (1651 ~ 1716) である。彼は Westfalen, Lemgo 出身のドイツの博物学者兼医者であり、Lemgo のケンペル図書館には彼の来日以前のヨーロッパ人による日本見聞記や日本関連書がかなりあったと思われ、オランダ東インド会社の医官として 1690 年 9 月 25 日長崎へ来て、二カ年の滞日中やはりオランダ商館長に従って 91 年、92 年の再度、江戸に参府している。その際、彼は天賦の上層部の人々に取り入る気さくな才能を発揮し、将軍綱吉の要望に応え、自作の詩を謡い、踊ったと云われている。その長崎に居た二年間、日本人へ医術を教示し、日本人学生及び患者からは日本の動植物の分布、地理、歴史、宗教、政治体制等に就いてのあらゆる情報を徹底して蒐集している。当時、西洋美術を積極的に取り入れようとする雰囲気があったわけである。彼のこの姿勢は後に来日する有名なオランダ人としてシーボルトと呼ばれたドイツ人であるジーボルト (Philipp Franz von Siebold) (1796 ~ 1866) に引き継がれるのは日本史で学んだ周知の事実である。なお、彼等とは別に、ケンペルの生きて

いる時代に、実際には多くのドイツ人が日本を訪れている。1633 年から 1687 年迄の 54 年間にオランダから東インドに向かった約 2000 隻の船の内、64 隻の乗組員の名簿が残っており、それによると 9200 人の船乗りの内、約 12% がドイツ人、6% がスカンジナビア人であり、2000 隻全体で換算すると、ドイツ系乗組員の数は三万人になり、その内のかなりの乗組員は日本迄来ていると思われるからである。なおケンペル来日 1690 年迄 17 人のドイツ人の名が判っており、その内 10 人が見聞録を残して居るといわれている。例えば、ケンペルがドイツへ帰ってから訪日体験のあるドイツ人を集めて Lemgo で開いた一種の同窓会には Hessen, Kassel 出身で東インド会社、出島のオランダ商館長を 1682 ~ 83 年、1685 ~ 86 年に務めた医師のクライアー (Andreas Cleyer) (1634 ? ~ 1710 ?) その他がいる。

そのケンペルは 1694 年オランダに戻り、同年四月、オランダのライデン大学に論文を提出し医学博士の学位を得たが、その論文には日本の疝気療法や鍼灸に関する論述も含まれていた。彼は日本や東洋に関する多くの知識をヨーロッパに紹介しようと試み、呉秀三 (1865 ~ 1932) 訳『廻国奇観』(Amoenitatum Exoticarum)、『日本誌』(The history of Japan) を著したが、日本へ来る迄のペルシャやその他東洋地域の自然や歴史に関する記録である前者が生前 1712 年に出版されたのに対し、有名な日本に関する調査資料である後者はイギリスに買い取られ、彼の死後十一年後の 1727 年にロンドンでしかも英訳で出版されたのである。その原文ドイツ語版 (Geschichte und Beschreibung von Japan) は更に五十年後の 1777 年に刊行され、各国語版もある。前者は、長い間戦乱に巻き込まれたヨーロッパの模範として、その様な事態を防ぐ鎖国政策を評価しており、それは後者にも採録され、1801 年長崎の蘭学者志筑忠雄 (1760 ~ 1806) により「鎖国論」として翻訳され「鎖国」と言う言葉及び概念の元になったと言われていた。一方後者は日本の社会、政治、宗教や動植物を鋭く観察したもので、ヨーロッパ人の日本研究、日本観に新紀元を画するものであると迄言われている。なお彼に関する文献としては呉秀三の『ケンペル江戸参府紀行』がある。

続いて日独交流史にとって重要な人物は日本史上では余りにも有名な事実と係わりながら、それが表面に現れない日独交流の歴史的事実としては人口に膾炙することなく、それ故にその事実と纏わる人物としても余り知られていない Johann Adam Kulmus (1687 ~ 1745) である。ドイツ人医学者であり、理学も学び、一時オランダに滞在した彼の『解剖書』(Anatomische Tabellen 1732) はオランダ人 Gerard Dichten によってオランダ語に訳され二年後の 1734 年にアムステルダムで Ontleedkundige tafelen として出版され、やが

て我が国に輸入されるや杉田玄白、前野良沢、中川淳庵らによって翻訳された。1774年に出版されたかの有名な通称ターヘル・アナトミア、『解体新書』であり、我が国の蘭学及びヨーロッパ医学の発展に寄与した貢献は計り知れないと云われる。

なお上述の事実に似たような事例として本木良意（庄太夫：ショウダユウ）（1628－1697）によるJohann Remmelinの医学書のオランダ語版（1667）の翻訳書『レメリン解剖書』（1680年翻訳、1772年鈴木宗伝出版）があり、大槻玄沢（1757－1827）による外科医Laurens Heister（1683～1758）の外科書のオランダ語版（1741）の翻訳出版書『瘍医新書』（1826）がある。HeisterはFrankfurt am Mainの生まれで、Giesen, Leiden, Amsterdamで学び、オランダの大学の教授となっている。上述の外科書はドイツで最初に外科学を科学的に記述したものと云われている。

『解体新書』が出版された後幾人かのドイツ人医学者が来日し、幕府医官に医術を伝えているが、その後の重要な人物はシーボルトである。彼は1796年Bavaria王国、現バイエルンのWurzburgに生まれ、その地の大学で医学を修め、内科、外科、産科についてドクトルの学位を得た後、オランダに移り、オランダ領東インド陸軍病院附外科少佐へ任じられ、パリ、フランクフルト、ボン等で極東での研究の準備を行ってから、先ずジャバに赴任（1822年）、引き続きオランダ東インド会社の長崎出島商館医師として日本研究を命ぜられ1823年8月8日長崎に到着、同11日上陸着任した。これは英仏の東洋進出により、オランダ領東インド、つまりインドネシアにすら圧力を受け、対日交通も脅かされ、オランダ永年の独占的権益であった対日関係にも危機感を抱いたオランダがその対日関係の再強化の必要性を痛感し、その事前準備としてアジア研究の問題意識を抱き、日本の風土や日本人の文化にも造詣の深い人物シーボルトに白羽の矢を立てたのである。言うなればオランダの極東政策の一環としてであった。同年9月には長崎遊郭丸山の遊女其扇（ソノギ）を妻にする。

シーボルトの時代はドイツが啓蒙主義の洗礼を受けた時代であり、ヨーロッパ人文主義は栄え、医学も当然、自然科学＝人文科学を包摂する百科全書的学問の雰囲気を持っていた。シーボルトは正にその様な学問を身に付けており、東洋文化への関心も深かった。一方当時の鎖国封建王国日本も単なる狭義の医学の領域を超えた自然＝人文科学と近代的な思想、更に軍事・政治・経済に亘る膨大な新知識を蘭学に求めていた。シーボルトは正にその意味でも適任者であり、要するに内外の期待に答えていた。彼はケンペルにも私淑していたと言われ、当然、医師としての診療行為に止まらず、ヨーロッパ文化に於けるドイツ学術の存在に気がついていた当時の日本の青年達に自然科学のあらゆる知識を与え、日本の学術発展の基礎を築いた。勿論医師としての彼の活動は目覚ましく、彼の優れた治療術は多くの日本医学生を引きつけ、1824年には長崎の東部鳴滝に塾を作らせた。彼は一定の日に此処で日本の弟子達に臨床講義を行い、外科・産科・眼科等の手術を供覧した。彼の名声は高まり、多くの医師や患

者が集まった。

1829年迄の彼の六年間に亘る最初の滞在中、一度だけ彼はオランダ商館長に随行し、江戸へ行っている。その旅行中、彼が如何に熱心に日本を観察し、日本人が如何に熱心に彼から学ぼうとしたかは彼の著書、Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzlanden, 2Bd. (1832～1854)等に詳しく書かれていると云う。彼の江戸参府は1826年の事であるが、此の年は日本の医学研究が世界へ飛躍した重要な年でもあった。つまり、彼がケンペルと同様に門弟にオランダ語で論文を書かせた結果、鳴滝塾の塾頭の1人美馬順三（1795～1825）が書いたオランダ語の日本産科問答の独訳が此の年、フランクフルトの産科学雑誌に掲載されたのである。日本人が書いた医学論文がヨーロッパの雑誌に掲載された最初のものとして居る。彼の高野長英もオランダ語で植物学等に関する論文を書き提供している。シーボルトはこの様にして幕府に知られずに日本に関する研究を続け、日本に関する万般の研究資料を集め、記述していた。此の事が、1828年の帰国を意図した際、その帰国船コルネリウスフートマン号が8月1日（陽暦9月18日）に台風の為難破し、その積荷より日本地図、その他数多くの持ち出し禁止の品が発見されると云う事件となり、取調べを受け、翌年末、長崎奉行によるシーボルトの所払い、つまり永久追放と云うシーボルト事件となった。

彼は帰国後Leidenに住み、多くの著書を出版し、日本に関するものとして、上記のもの以外に『日本動物誌』（Fauna Japonica 1833～1851）、『日本植物誌』（Flora Japonica 1835～1870）等を出版している。そして帰国後も開国を迫られている日本の国際的地位を心配し、日本の為の色々と奔走している。此のシーボルトは再度日本へ行くことを念願し、日本の鎖国政策が解かれ、彼の追放も解かれた1859年、オランダ商事会社社員として十三歳の長男Alexanderを伴い三十年ぶりに長崎に来た。1861年より二年間は幕府の顧問として江戸に滞在し、旧知にも再会しドイツ医学も教えている。その後オランダに帰り、1864年には幕府の遣欧使節竹内下野守（保徳：ヤスノリ）（1806～）一行の為にパリへ赴き斡旋の労を執っている。彼は七十歳でミュンヘンに没している。彼の門弟には岩手の水沢出身で幕末の思想家として、更に医書や兵書類の著述や翻訳で余りにも有名な高野長英（1804～1850）、眼科医でシーボルト追放後、彼と日本女性の間生まれた女兒を育て、又多くの医学に関する著書を著している高良斎（1799～1846）、シーボルトの帰国後、代理として塾で講義をした戸塚静海（1799～1876）、後に明治天皇の侍医となり、西洋医学所取締にもなった伊東玄朴（1800～1871）、將軍侍医、西洋医学所所長になった竹内玄同（1805～1880）等があり、彼等によって日本中にヨーロッパの医学と自然科学が広められた。ともかくシーボルトが日本とヨーロッパに掛けた文化の架け橋は限りなく膨大であった。

なお彼の長男Alexander G.G.von Siebord（1846～1911）は父の帰国後も日本に残り、父の門人達より日本語を習得し、駐日イギリス公使館附特別通訳官、

更に正通訳官となり、その後は日本の様々な外交交渉に通訳等で活躍し、日本の外交交渉に大いに貢献した。またシーボルト以外にもオランダ陸軍軍医としてやはり長崎出島の商館付き医師となり、1849年初めて日本人に種痘を施して成功し、長崎奉行に建議して日本人医師に種痘法を伝受、更に自らも実施した Otto Gottlieb Johann Mohnike (1814 ~ 1887) の様なドイツ人が数人いる。彼は 1850 年江戸に参府した際、日本に初めて聴診器の用法を伝えている。

1860 年にはプロイセンの艦隊が来日し、東アジア探検隊員として同乗していた地理学者兼地質学者 Richthofen (Ferdinand, Freiherr von 1833 ~ 1905) 男爵等が四週間の長崎滞在中に市川兼恭 (カネノリ)、加藤弘之等に初めてドイツ語を教授し、松本良順門下の司馬凌海はそれに応じて短い期間にドイツ語をマスターしてドイツ人を非常に満足させた。司馬は後に 1872 年日本で初期の独和辞典を編纂した。一方日独が本格的に外交交渉をもったのは、1862 年幕府が初めて竹内下野守を正使とする三十六人の遣欧使節団を英艦に乗せて品川沖より送り、イギリス、フランス、オランダ訪問の後に彼等が日普条約締結延期交渉の為、プロイセンの首都ベルリンを訪問し、国王 Wilhelm Friedrich Ludwig (1797 ~ 1888) 一世に謁見を受け、歓迎された時である。同行者には福地源一郎、松本弘庵、福沢諭吉の様な錚々たる当時の知識人、文化人がいた。そこで彼等はパリ、ロンドンを見学した後のオランダの小国ぶりと衰退に気付き、異口同音にドイツの大国ぶりに刮目し、ドイツから学ぶ必要性を意識した。

なお上述の事実とも関連するが市川兼恭、加藤弘之が蕃書調所より命を受け、独逸学を学ぶ事になったのは 1860 年 7 月であり、これが独逸学の嚆矢であると言えよう。彼等はオランダ文との対訳のドイツ文法書やその他の書物を大分研究したと述べている。そして 1863 年蕃書調所に独逸語学科が確立したと言う。しかし山岸光宣氏の労作『日本に於ける獨逸語研究の沿革』(『獨逸文学』1903 年三月)によると、独逸語の学習は既に水戸藩の徳川齊昭が 1799 年に長崎の通詞、楢林重兵郎を水戸に招き、ゼルマニアの話聞き、その後独逸語の学習と独逸書『獨逸兵書』の写本十二冊と『蘭獨対訳辞典』の一冊の翻訳を試みたと言う。非常に興味深い事実である。

次に日独交流史を述べる時、時代は明治維新以降の事になる。明治二年(1869 年)6 月、明治政府は旧幕府直轄の高等教育機関昌平学校(昌平坂学問所)を大学とし、これにやはり旧幕府設立の学問施設開成所(蕃書調所の後身)を引き継いだ開成学校を分局統合し、同年 12 月大学南校と改称した(本郷湯島にあった大学本校の南にあたる神田一ツ橋に位置していた)。一方下谷御徒町にあった医学所を引き継いだ医学校を大学東校とした。現在の東京大学法・理・文学部の源流、大学南校では英仏学と共に独逸学も教授され、地理、歴史、物理が英仏独語で教授された。1870 年にはスイス人の最初のお雇いドイツ語教員が就任している。しかし独逸学を学んだ者は三百人近い人数中十七名であり、ドイツ語を学んだ者も多くなかった。此の 1870 年 2 月 15 日日本政府は正式

に優秀な独逸医学を日本に取り入れる事を決め、維新以前の 1961 年来日し、鳥羽伏見の戦いの際に京都相国寺の薩摩藩病院で官軍の負傷兵の治療に当たり、北越の官軍にも従軍し、ついで横浜の軍陣病院に勤務、更に東京の大病院で外科の治療及び学生の指導に従ったイギリスの William Willis (1837 ~ 1894) が鹿児島に招かれ東京を 1869 年去った事もあり、プロイセンの使節 F.A.Eulenburg 男爵に随行して日本プロイセン条約に調印して以来(1861)、駐日領事、同代理公使、北ドイツ連邦総領事を歴任し、日独条約改訂(1869)後駐日全権公使(1872)にまでなった M.A.S.von Brandt との契約でドイツから医学教師二名を三年間の契約で雇う事になった。この様にして翌 1871 年 8 月、陸軍軍医少佐 Leopold Muller と海軍軍医少尉 Theodor Eduard Hoffmann が後の東京大学医学部となる大学東校に赴任した。前者は外科、婦人科、眼科を講じ、教師の首班として学則制定に当たり、我が国に於けるドイツ医学移植の基礎を築いた。後者は内科、病理学、薬物学を教授した。彼等は当時の日本文部省の支持もあり、言語、風俗、習慣の異なる日本に抜本的にドイツ式教育制度を取り入れたのであり、卒業まで八年間のインターン制度もこの時に確立されている。また Muller が学生に過度の負担がかからぬ様に全授業を通じて使用する外国語をドイツ語に統一した事が日本に於ける長い期間に亘ってのドイツ医学の影響と医者とのドイツ語使用に繋がった。此の二人が三年契約の後、日本を去ってからも多くドイツ人教師が薬学、理化学、博物学、解剖学、生理学等の為に招かれているが、長い間日本に滞在し、東京大学で教鞭を執った特筆すべきドイツ人は 1876 年来日し、1906 年まで三十年間滞在して二十六年間教鞭を執った Erwin von Baelz (1849 ~ 1913) と 1881 年来日し 1901 年迄二十年間教鞭を執り、東京で没した Jurius Scriba (1848 ~ 1905) である。前者は東京大学での講義と診療と共に、脚気、ハンセン病、ジストマ等の疾患、温泉療法、人類学、公衆衛生の方面迄研究を進め、直接教えを受けた者は八百人以上にのぼる。彼等が日本の医学に残した功績は計り知れない。次に 1871 年 11 月 12 日(陽暦 12 月 23 日)右大臣岩倉具視(1825 ~ 1883)を首席とする総勢五十人前後と 60 名の留学生(津田梅(9)等五名の女子留学生)を加えると百十名に達する大型使節団が横浜港より欧米歴訪の旅に出た話をしたい。この使節団の目的は幕府時代に結ばれた不平等修好・和親諸条約の改訂であった。使節団には副使に参議木戸孝允(39)、大蔵卿大久保利通(42)(この二人は途中帰国)、工部大輔伊藤博文(31)、外務少輔や山口尚芳(33)等錚々たるメンバーがいた、その訪問先はアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイス、十二カ国に及んだが上記の目的は実現せず、その上当初予定していた十ヶ月の滞在は 1873 年九月十三日(陽暦)迄延びたが、一方此の二年間に使節団は欧米の実状をつぶさに視察し、時間をかけ、政治・法律・軍事・生産の諸制度を入念に検討し、当事者達とも会談出来た。彼等が視察したものは議会・裁判所・刑務所・軍隊・工場・病院・学校・図書館・博物館・

美術館・教会・娯楽施設にまで及んだ。そして彼等が1873年3月9日ベルリンへ到着した後、イギリスに到着した時点で、大山巖、桂太郎等と共に普仏戦争開戦（1870年7月19日）直後の8月25日に戦況視察の為に日本を出発、アメリカ経由でロンドンに到り九月中旬フランス敗北の報告を受けて10月23日ベルリンへ既に到着していた品川弥二郎、青木周蔵等から告げられていた当時の普仏戦争直後のドイツの発展を、三週間の精力的視察により目の当たりにし、3月15日宰相ビスマルク、参謀総長モルトケとも会談している。これが1869年10月には海軍はイギリス式、陸軍はフランス式、法制に就いてもフランス法支持に傾いていた明治政府の方針を変更し、日本の当時の実状に類似したドイツの軍事・政治・経済・教育制度等の全面的取り入れに繋がるのである。（なお、この使節団に関しては久米邦武著「特命全権大使米欧回覧実記」に詳しく書かれている。例えば1871年3月～5月の反帝国主義、反ドイツのパリコンミュンに就いての報告は蜂起した民衆を賊徒、暴徒、暴発と表現している。）

上述の大学南校、大学東校と並んで、或いはそれ以上にドイツ学受容史にとって重要な役割を演じたのは1881年9月18日、会長に北白川宮を奉じ、内務官僚品川弥次郎を委員長とし、発起人に後の内閣総理大臣桂太郎、「哲学の父」西周、法制官僚山脇玄等を加え、会員に東京大学総理加藤弘之、法制官僚平田東助等も居た獨逸学協会の設立である。その定款には獨逸学振興、その獨逸学には政治学、法学、医学、文学、理学、工学、農学が含まれる事がうたわれており、その直接的目的には獨逸学の学校を設け学士を養成し、当分は獨逸書を翻訳並びに刊行する事が挙げられている。この定款の目的に基づいて二年後の1883年10月22日、西周を初代校長とし初等科と高等科よりなる獨逸学協会学校が麴町五番町で開学し、翌年西小川町の旧北白川宮邸跡地に移転した。この学校は1885年7月より五年制の普通科（14歳以上）の他に二年制の専修科を持つ学校となり、普通科三年の課程を修了した者の専修科への入学を認めた。普通科はドイツ語教育中心の高等教育予科の特色を持ち、専修科は法律・政治の専門学科となった。即ち、この専修科は九月より明治初期のいわゆる「法律学校」として出発したわけである。この獨逸学協会及び協会学校が生まれた背景には実は当時の明治政府の方針が反映していた。即ちイギリスやフランスの自由主義、啓蒙主義の政治体制より、ほぼ日本と同時期に国家の統一を成し遂げ、皇帝を擁するプロイセン＝ドイツの絶対主義的政治体制の方が天皇中心の日本の政治体制に相応しいし、当時日本でも興りつつあつた自由民権運動に対抗する上でも有効と明治政府が考え、その学問を取り入れる事を考えたからである。そう云う意味では保守的な方針に基づいた獨逸学協会であり、協会学校であった。

獨逸学協会のもう一つの目的であった獨逸書の翻訳、刊行には先ず1883年10月に第一号刊行の運びとなった「獨逸学協会雑誌」があり、以後1889年3月の第六十六号迄毎月一冊づつ出版され、多くの法律、政治に関する論文が翻訳された。更に法律や国家に関する個別な論文の翻訳も単行本として出版された。

この獨逸学協会学校は開学後二年目の1885年10月に既に三名のドイツ人教師を招聘して、専修科で法律・政治に就いてドイツ語での授業をさせており、その教師とは教頭ゲオルク・ミヒャエリス、(Georg Michaelis 1857～1936)、フェリックス・デルブリュック (Felix Delbrueck)、エルンスト・デルブリュック (Ernst Delbrueck) であり、1889年、彼等が帰国した後は、やはり教頭としてのレーンホルム (Ludwig Hermann Loenholm)、ニッポルト (Otfried Nippold)、ヴェルニケ (Johannes Wernicke) が赴任している。更にドイツ語教師としては1885年以來のヘーリング (Otto Herring)、1887年以來のエーマン (Paul Ehmann) が赴任している。獨逸学協会学校初代校長西周、第二代校長桂太郎の時代に、教頭として在職するドイツの若き判事ミヒャエリス招聘に尽力したのは、例の欧米使節団の先遣隊員で、後にドイツ公使となった青木周蔵であり、ミヒャエリスはドイツ帰国後、國務次官や食糧庁長官を経て第一世界大戦中に短命ではあるが、ドイツ帝国首相に迄主世した。またF.デルブリュック、E.デルブリュックは夫々帰国後大審院検事、統計局長官となっている。彼等の後に赴任したレーンホルムは帝国大学のドイツ法科でも講義しており、日本の民法・商法・刑法を独訳し海外に紹介し、ニッポルトには法律関係の著書があり、ヴェルニケには政治に関する著書がある。ヘーリングは学習院でも、エーマンは慶応義塾の法律科でもドイツ語を教えている。ミヒャエリスにはドイツの法学は最も優れており、それをドイツ語で教えていると云う自負があり、それが当時東京大学、つまり帝国大学ではドイツ法を英語で教えている事に対する批判的発言に迄なっている。英語でドイツの法学を修める生徒はドイツ語の著書を読めないと云うわけである。

ところで獨逸学協会学校専修科は廃止される1995年7月迄続くのであるが、専修科の卒業生には文官高等試験の受験資格が与えられ、専修科の卒業生の多くはその試験や司法官試験に合格し、行政官・外交官・司法官になり、学界や財界で活躍した。

なお東京大学で最初からドイツ的教育が行われていたのは、前述した様に医学部だけであつたが、実は獨逸学協会が設立された頃、獨逸学協会会員であり、既に東京大学総理であり、後の1890年7月より第三代校長を帝国大学総長と同時に務めた加藤弘之が、東京大学他学部でもドイツ学奨励を打ち出し、とりわけ法学部でそれを推進したのは1876年よりイギリス・ドイツへ留学し、加藤の書簡により1881年に帰国し、翌年二月に法学部教授、法学部長となった獨逸学協会会員でもある穂積 (入江) 陳重 (ノブシゲ) であつたと云う重要な事実も付け加えたい。更に日独交流史上、日本からの働きかけとして注目すべきものに1893年加藤が先ずドイツ語で、次に日本語で書き、東京で出版し、翌年ベルリンで刊行した「強者の権利の競争」がある。これはドイツでも高く評価されたのである。なお専修科廃止の1895年7月以降、獨逸学協会学校はドイツ語教育機関としての役割のみを果たす事になった。

次に日独交流史上重要な事項と言えば、第一次世界大戦時 (1914～1918) 日本がドイツに宣戦布告を

し、当時ドイツの租借地だった中国山東半島膠州湾口青島を攻略し、その結果 4697 名 (4715 名) のドイツ人 (オーストリア人も含む) 将兵が、鳴門市、久留米市、習志野市等日本各地の計 16 箇所の収容所に、1915 年よりドイツ敗戦後 1920 年迄 5 年余り捕虜として収容された事であろう。鳴門市坂東俘虜収容所に就いてはつい先頃映画化もされたが、そのドイツ兵捕虜達によって、日本で初めて「ベートーヴェン交響曲第九番」が演奏され、その「歓喜の歌」が歌われ、それには一般庶民も招かれた庶民レベルの交流所として余りにも有名である。久留米市に関しては 1990 年代より、ドイツ及び日本に於いて資料収集整理が始まり、1996 年にドイツ・ヴェルツブルクで、1997 年に久留米で夫々展示会が開かれ、1999 年には日本側の報告書「ドイツ軍兵士と久留米」が出版され、翌年ドイツ語版も出ている。また習志野市に就いても資料収集があり、日独協力により 2000 年 1 月「ドイツ兵士の見た NARASHINO・習志野俘虜収容所 1915～1920」が開催された。これらの捕虜の中から日本滞在者が現れ、ドイツ菓子店「ユーハイム」の創業者カール・ユッフハイム、銀座でドイツレストラン「ケテル」を興したヘルムート・ケーテル、日本のワイン作りに功績のあったハインリヒ・ハム、日本のゴム産業、ソーセージ製造、製パンに大きな功績を残したドイツ人達、更に日本の当時の大学で講義をした人々がいた。

ここで話題を変えて日本の美術がドイツの美術に与えた影響を考慮したい。日本の浮世絵が 19 世紀末フランス中心の印象派やファン・ゴッホ等に影響を与え、それがドイツ美術にも及んだ事は兎も角、二十世紀当初より、ドイツと云うよりヨーロッパ全体の美術及び文学運動に偉大な影響を及ぼした表現主義運動、とりわけその中のカンディンスキー (W.Kandinsky)、フランツ・マルク (Franz Marc) が興した「青騎士」(Der Blaue Reiter) に日本の絵画が影響を与えている事は同名の年鑑誌に掲載されている日本の絵画を見れば明らかである。ところがこの表現主義が今度は日本

へ影響を及ぼし、その映画、美術、文学は 1910 年代より 1930 年にかけて日本での積極的受容を呼び、とりわけ 1920 年代の表現主義演劇の築地小劇場での上演は当時大センセーションを巻き起こしている。もちろんドイツ文学の日本への翻訳紹介は 1880 年のシラー (Friedrich von Schiller) の「ヴィルヘルム・テル」(Willhelm Tell) (齋藤鉄太郎訳『瑞西獨立自由の弓弦』) 以降始まっており、ヘーゲルの哲学はそれ以前に知られていたと云う。それ以来のドイツ文学の日本への紹介は膨大であり、一覧表を見て頂きたい。

次に日独交流の負の側面を考えると、1931 年 1 月 30 日、ドイツの民主主義的政治体制ワイマール共和国が崩壊し、ヒトラーが政権を握り、同年 5 月ナチス党による一党独裁支配が成立した後、日独伊三国の国際連盟脱退、日独防共協定 (1936 年 11 月 25 日)、日独伊防共協定 (1937 年 11 月 6 日) と続き、日独伊三国同盟 (1940 年 9 月 27 日) に到った事であろう。これにより日独と世界の関係は悪化し、第二次世界大戦、太平洋戦争に突入し、1945 年 5 月ドイツが、8 月日本が敗北する。ナチスの政権奪取以降、日本の多くのドイツ文学を中心とするドイツに係わった学者達はナチスとヒトラーを賞賛し、日独防共協定以降、1937 年 1 月 18 日にはドイツ海軍練習巡洋艦エムデン号が横浜港に入港し、更に 1938 年 9 月 27 日にはヒトラーユーゲントが来日し、日本国民より歓迎されるが、両度に互り、獨逸学協会学校の後身獨逸学協会中学校の生徒が歓迎している。1945 年の日独敗北後は日独関係は中断し、両国の交流が再開するのは 1950 年代になってからであり、東西ドイツが 1990 年に統一する迄ドイツの二つの国との盛んな交流が続き、昨年今年と日本に於けるドイツ年を迎えたわけである。

註 ケンペルに就いては『無限大』No.87 1991 年春<特集>『ケンペルの見たトクガワ・ジャパン』のとりわけ、クライナー・ヨーゼフ、B・M・ボダルト・ベイリーより、多くの示唆を受けている。

## 目 白 だ よ り

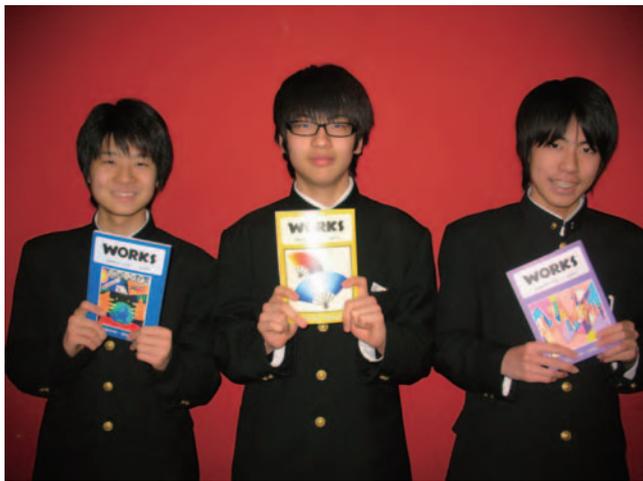
### 1 万 2 千 字 ( 以 上 ) の 冒 険 — 研究論文から WORKS へ

WORKS 編集委員会 柳 本 博

獨協生は中 3 から高 1 で大きく変わります。成長期だからあたりまえ？ いえいえ、中 2 → 中 3 や高 1 → 高 2 より明らかに異なります。義務教育と高校の違い。それだけではありません。もちろん背もゲンと伸びるとき、ヒゲもうっすら……。いいえ、違うのです。豊頬の美少年が引きしまった顔つきに。まるで別人へと変化します。なぜでしょうか。答えはひとつ、バンジージャンプ！



「永久機関はどうしてできないのか」「歩くことの素晴らしさとさまざまな取り組み」「鉄道がなぜ便利で安全に運転されているのか」。……こんなテーマで、毎年、中学3年生は一年間かけて〈研究論文〉に取り組めます。原稿用紙30枚以上。400字×30枚ですからざっと1万2千字以上を中学生が埋めることになります。大変な数です。大学時代に卒業論文に悩まされたかたも多いでしょう。果敢にも、義務教育最終段階の中学生がチャレンジするのです。これぞ冒険といわずしてなんでしょう。以前は一部学生の独自の取り組みだったものから、学校全体の行事となってもう20年ほど経つでしょうか。中学2年時からテーマを探し、中学3年の一年間をかけて進めていきます。春のレクチャーから参考資料集め、テーマのしぼりこみ、夏休みの下書き、秋の清書、そして冬の発表会までが春夏秋冬の大体のスケジュール。最終的にはきちんと製本されて手元に永久保存版となります。担任や教科とは関係なく専任教員が何人かの生徒を担当して、丁寧に指導をしていきます。その分野のエキスパートになろうということが第一の目標です。実際、思わず舌を巻くような論文に出会うことも少なくありません。原稿用紙百枚以上という猛者もちらほら。また、成果をまとめて掲載する『WORKS』という作品集も



毎年発刊しています。こちらも昨年(2011年)に18号を数えました。論文の優秀作品4~5本だけでなく、中高6年間全体の理科社会などの研究レポート、創作、美術や書道など芸術科の作品までカラー口絵で網羅して、いわば、いつでも手に取れる本校の「読む文化祭」として定評を保っています。

研究論文に話を戻しましょう。テーマはなんでもいいのです。地球温暖化などの環境問題や地震のメカニズムなどの定番から、ユニークなものも少なくありません。「ホームランを打つには?」「UFOは存在するか」「忍者の隠された真実について」「笑う理由とその効果」「ディズニーリゾートの魅力と工夫」……。すべて2011年に実際出た題です。一見、どんな教科に属するのか「はてな?」の分野まで、それこそ千差万別、多岐にわたります。もちろんすべてOK。もともとは高校入試のない中学3年時を有効に活用するために、という目論見もありましたが、綿密なプログラムにより、その気さえあれば丁寧で奥深い研究が可能となるシステムとなっています。知的好奇心をエンジンに自らの力で文献にあたって調べていく。そう、まさに、本来の「学習」です。取り組んで少年たちにとっては、その分野(細分化されたものではありませんが)においては、誰よりも、もちろん教師である我々よりも詳しく知りえたオーソリティーとなります。成長のステップの跡は明白です。獨協生は、中学から高校になったから大きくなったワケではなく、論文を書き上げ、1万2千字以上の冒険をゴールまで、天竺まで、メッカまで到達(あるいは生還)しえた自信と誇りを手にします。

手書きがワープロからパソコンへ。1万2千字もあくまで(換算)の世界となりました。昨今のインターネット社会、急速なIT化に悩みも生じます。安直なコピー&ペースト、不確かなネット情報に振り回されること、困惑し混乱する例も少なくありません。進む道もそれぞれ。独自性も求められます。それでも、通過儀礼であり、知的・精神的なバンジージャンプになっている、と「!」をつけるのは大げさすぎるでしょうか。

## 全国中学校大会・ 関東高校大会に出場 ～スキー部は、復活～

スキー部顧問 窪田 潤(数学科)

同窓会の皆様、校舎2階に掛けられた垂れ幕をご覧いただきましたか。今シーズン、スキー部員は全国中学校大会に、また関東高校大会に出場することができました。是非、一度ご覧頂きたいと思います。特に、今までスキー部を支えてこられたOBの皆様には先輩

の意思を継ぎ、後輩が頑張っている証を確かめてみてください。

ご存知の方も多いと察しますが、活動報告の前にスキー部の歴史に触れてみたいと思います。スキー部はスキーブームに沸く1960年代に産声をあげ、新潟県出身の倉地芳行先生(故人)による熱血指導のもとで東京都の高校スキー部の先陣を切る勢いで全国大会や関東大会に出場し、優れた成績を残してきました。スキー部の高校生に配布されるハンドブックには、1966年東京都高校スキー大会での大回転競技優勝の輝かしい記録が今も掲載されています。1980年代には高体連の役員も務められていた音海紀一郎先生(定年退職)も加わり、東京都のスキー大会で活躍し、全国大会や関東大会に出場してきました。まさしくス

スキー部の絶頂期でした。

このような輝かしい歴史をもつスキー部の顧問として指導することになったのは1990年代半ばでした。引き継いだ数年間は、高校1、2年に優れた部員がいて、幸いにも全国大会や関東大会に出場する機会を得ることができました。しかし、この頃から部員が減少し始め、毎年10名を数えるほどの小さな所帯になり、部の目標に大会での成績向上のほかに部員を一人でも多く集めることも加わりました。このような状況でもスキーに対する熱い思いを持つ部員に支えられて現在に至っています。ここ数年、保護者の勧めによるものか、スキー人口の減少にも拘らずジュニアの時から競技スキーを始め、スキー部のある中学校を志望する受験生が増え、入学と同時にスキー部に入部する生徒も多くなりました。このような状況のもとでスキー部の活動を報告していきます。

現在、スキー部は益子和富先生（数学科）と2人の顧問のもと、28名（中学19名、高校9名）の部員で月・水・金の週3回の練習をしています。とは



言え、学校の周辺にスキーができる環境はないので、学校周辺でランニングを中心としたトレーニングをしています。時には童心に帰って？空き地で鬼ごっこをしています。部員のレベルが上がり、シーズンオフの活動内容にはまだ改善の余地があると考えています。

部活動のメインはやはり雪上に立てる12月の菅平合宿です。期間中の6日間、スキー操作の基礎確認からポール内での応用技術習得までプロのコーチングを受けながら密度の濃い練習が行なわれています。ここ数年、同一のコーチのためコーチングに慣れてきたこと、高度な技術をもつ部員が増えて良い目標が身近にあることなど部員のレベルアップに繋がってきていると実感しています。その結果、年明けの1月に行われる中学・高校の全国大会予選に向けて部員のモチベーションが高まっています。また、この合宿にはもう一つ大きな目的があります。それはスキー部員としての自覚を育成することです。スキーは個人スポーツと言われますが、競技スキーをするためには多くの人の力を必要とします。上級生も下級生もありません。一人ひとりが役割を考え、果たさなければ練習も大会も成り立ちません。そのことを学べる絶好の機会でもあります。この合宿を経験しながらスキー選手として一歩ずつ成長していきます。その姿をスキー大会の会場で見かけたら一声掛けて応援して下さい。チーム揃いの校章の入ったジャケットを着用しています。

最後になりましたが、一人でも多くの部員が全国大会、関東大会に出場できるように顧問一同、指導していきたいと考えています。同窓会の皆様、スキー部OBの皆様へ御指導いただきながらスキー部を益々発展させていく所存でありますので、宜しく願いいたします。

## 神原駿太郎君 「もっと明鏡」大賞 最優秀作品賞受賞！

国語科 齋藤有子

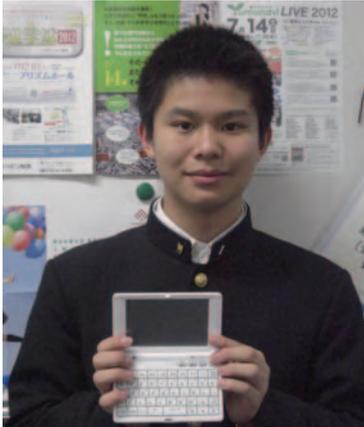
中学3年生の「表現」の授業で、『「もっと明鏡」みんなで作ろう国語辞典』に挑戦し始めたのはいつごろからだったろうか？お堅い評論文を受身で読むだけでなく、たまにはちょっとくだけて、頭を柔らかくして発想させてみようというのがきっかけだったように思う。

そもそも表現の授業は、4コマ漫画のオチを考えたり、少人数でグループに分かれディベートを行ったりと、普通の一斉授業とは違った、バラエティに富んだ切り口、自由な発想を尊重する雰囲気が特徴である。だからこそ、生徒諸君も妙な答えを言ってクラスメー

トから失笑される心配もなく、自信を持ってすばらしい（！？）考えを披露することができるのだ。顔に似合わずロマンティックな文章を書いて（失敬失敬）拍手を浴びる生徒や、鋭い切り口で討論相手を切り崩す生徒、中には思わず「原作を超えるのではないか？」とこちらがうなってしまうオチを考える生徒もいたりして、この授業は教える側も非常に楽しいものなのである。栄えある最優秀作品賞受賞には、神原君の豊かな感性はもちろん、こういったよい意味でのリベラルさも関係しているだろう。

今回表彰された神原君だけではなく、本校では他にも優秀賞・佳作を受賞した生徒が12人おり、今年も（もに注目願います！）学校賞をいただいた。近年受賞作が増えてきているのは担当教科としても嬉しい限りであるが、やはり最優秀作品賞＝最上級。なにせ8万4100通の頂点なのだ。神原君本当におめでとう！そして後輩諸君、先輩に続いてトップを目指すのだ！

「電索」 中学3年4組 神原駿太郎



僕が『もっと明鏡』大賞 みんなで作ろう国語辞典!」に応募することになったのは、表現の授業の一環として、各人が新しい言葉を考え、それを用紙に書いて提出するという課題が出たからです。そこには、大賞を取った「電索」以外にも

色々な言葉を考え書いていました。

「電索」とは、「電子辞書で検索する」の略です。これを思いついたきっかけは、表現の授業中に近くの席に座っている人が電子辞書を使って言葉を調べているのを見たことです。

自分の作品が最優秀作品賞をとったことを教えてくれたのは、担任の先生でした。家に先生から電話が来たときは、なぜかかってきたのか理由がわからず、自分が何か悪いことをしてしまったのかもしれないとドキドキしていました。そして、先生から受賞を聞かされた時には信じられず、とても驚きました。

僕はこのようなコンクールで最優秀作品賞を取れたことを大変光栄だと思っています。

## 南三陸町への コンテナハウスの寄贈について

鳥山靖弥

2011年の獨協祭は、東日本大震災の復興支援活動として、金券の売上げや募金などをもとに「コンテナハウス図書館の寄贈」のプロジェクトを全校的に推進してきました。コンテナハウスは、本来、戦場などでも使用されている耐久性に優れた簡易建物施設です。生徒会や文化祭実行委員会で話し合っ、被災地の同世代の中学生・高校生が落ち着いて読書や勉強に取り組める場所が少ないという状況を踏まえ、コンテナハウス図書館を寄贈したいという考えに至ったものです。そして、震災直後からこの活動を進めてきた本校OBの国際ジャーナリストの菅原出氏（昭和63年卒）の専門的な助言と尽力を頂きながら、2012年2月3日に文化祭実行委員長や生徒会長など高校1・2年の生徒が現地へ赴き、宮城県南三陸町の戸倉中学校に建ててきました。このように結ばれた縁を大切に、今後も出来る限りの支援活動を継続的に行なっていきたく考えています。

以下に、文化祭実行委員会で副委員長として活躍し、現地での設置作業にも参加した楠正嗣君のレポートを紹介します。

今年度の文化祭は例年とは違った。来てくださる方全員が楽しんでもらうことは不変のテーマだが、更に「被災地復興支援」も加わった。そう、2011年3月

11日。東日本大震災があったからだ。

支援計画の最大のプロジェクトであったコンテナハウスも、最初、僕は本当に被災者の方々に喜んでもらえるだろうかと思っていた。しかし、その考えもある日を境に無くなった。生徒会・保健委員会のみんが東北へ行った時のことを聞いた日だ。最低限のプライバシーは仮設住宅により確保出来たものの、それは本当に必要最低限で、まだ不自由な暮らしであり、自分と同じ世代の人は落ち着いて勉強が出来る空間がない。しかし、もしコンテナハウスが建てば少しばかりではあるが、学習スペースを提供できるということだ。これを機に支援への迷いが消えた。

そして文化祭から4ヶ月後の2月3日。遂に実際に南三陸町へ行き、建てに行く日が来た。僕自身初めての被災地へ行ったが、目の前に広がる景色は想像以上だった。



コンクリートが無くなり、鉄骨が剥き出しになった建物。小さな丘かと思ったら実は瓦礫などを積み上げた山。折れ曲がった電柱。「夏休みに行った時と余り変わっていない」、生徒会長の勇君はそう言った。これが現実であった。まだまだ復興には時間がかかりそうであった。

コンテナハウスの建設は意外にあっさりと終わった。現地に着いた時には、既に

建設が始まっていて、最初はただぼーっと見ているだけだった。扱っている機材が素人には使えないものだからということもあり、最初はなかなかお手伝いするチャンスがなかった。もう強引に行くしかなかった。この考えは文化祭実行委員長の三輪君も同じだったらしく、2人で壁を支えにいたりした。これは後日知った話だが、現地の方は僕らが何者か最初は分かっていなかったらしい。しかし、僕達が何者か分かったこと

によりどんどん仕事を分けてもらえるようになった。窮めつけはコンテナの上に登れたことだ。そこからは、海がよりよく見えた。約1年前、あの海が荒れ狂い、多くの命を飲み込んだなんて考えられないぐらい、その時は穏やかだった。そして帰らなければならない時間が来た。ぎりぎりコンテナも建設し終えた。意外にあっけなく終わってしまったが、僕ら、いや全校生徒が協力の結晶であるコンテナハウスが目の前にそびえていた。「雨漏りしたら直しに来いよ！」現地の人はそう言ってくれた。あとはそこに本や机が入り、被災者の方々が使ってくれるのを望むばかりだ。

行きのバスで菅原さんはコンテナの機材が日本に着くまでの長い過程を話してくれた。

このプロジェクトには、想像以上の多くの人が協力してくれていたらしい。菅原さんには本当に感謝したい。そしてみんなの震災から復興しようという願いが、このプロジェクトを成功させたのだ。大震災から約1

年経ち、僕はこう考える。やはり津波などの恐怖は計り知れないものがあり、直接被災していない僕達は被災者の心情を、完璧に理解しているとは言えないかもしれない。何カ月も避難所で生活しろと言われても絶対に無理だ。だが、僕達にだって出来ることはある。例えば募金やボランティア。何か一芸がある人は被災地でパフォーマンスをしてみんなを笑顔にすることもできる。つまり、たとえ辛い気持ちを完全に理解しきれなくても、ほんの一瞬でもその気持ちを忘れさせることができ、生きるエネルギーを沸かせられるということだ。また、この震災の教訓などを次の世代に伝えることだって出来る。これが僕たちに課せられた使命かもしれない。

少しずつでもこの国なら復興できるはずだと思い、この被災地支援を来年の文化祭実行委員達に託したい。

## スキー部の活動紹介および雪上に残ったOB達

ク ラ ブ O B だ よ り

平成2年卒 宮地 健次

私は1988年から1990年まで新獨（今は中高一貫なのでこの言葉も死語だとは思いますが）として、獨協高校とそのスキー部に在籍していました。選手としての実績をほとんど残せなかった私が、スキー部について記すのは恐縮ですが、私自身スキー部を振り返るのにいい機会と思いお受けしました。

我が獨協スキー部は競技スキー部でした。マイナースポーツの悲しさですが、少しスキー競技について説明させてください。大きな種目としてはジャンプやクロスカントリーなどのノルディック、モーグルなどのフリースタイル、旗と旗の間をくぐり抜けてタイムを競うアルペンに分かれます。高体連にはアルペンの技術系種目、スラローム（回転）とジャイアントスラローム（大回転）で参加していました。ちなみに滑る型を競う基礎スキーは海外にはありません。バブルとメディアが日本で作ったガラパゴス種目です。

スキー部と言っても東京の学校ですから、そうそう雪上の練習はできるわけもなく、年間のほとんどは他の部活と同じく学校周辺での陸上トレーニングで過ごしています。今でも覚えている練習メニューは、最初にストレッチをして、学校から目白駅までの往復ランニング、戻ってきて体育館脇の坂を下って、公園か高速の下でサーキットトレーニング、50mほどの80%走、あと色々あって最後に下ってきた坂でダッシュを数本。学校の周りをクールダウンのジョギングとストレッチ、練習後には顧問の先生（当時は故倉地先生か音海先生でした）に報告に行き終わり。とこんな感じだったと思いますがこれを少なくとも週に3日以上は参加することになっていました。これには結構鍛えられて、スキー部は獨協マラソン大会でのメダル保持者が野球、ラグビー部に混じって多かった記憶があります。

顧問の倉地、音海両先生は部員がどれだけ頑張っているかをよく見てくれて、どこかで手を抜いていると、どんなに雪上で成績を出している部員でもカミナリが落ちていました。それは学業でも同様で、テストで赤点でも取ろうものなら合宿に連れて行ってもらえない、なんていう話もありました。私自身、3年生で部活は引退していましたが、マラソン大会でへろへろの私を音海先生が自転車で追い抜いて行きながら「部活終わってさぼってるんじゃないのか？」声を掛けてくれたときはドキッとしたものです。おかげで、普段から走るのが習慣になってしまいました。

スキー部の雪上活動ですが、5月ゴールデンウィークに妙高、8月に黒部、1月に再度妙高、2月に石打と、最低4つの高体連のレースがあり、この予選上に関東大会（確か尾瀬岩鞍）、インターハイと続きます。スキー部からは毎年関東大会には選手を送り込んでおり、もちろん私は上野駅に見送りに行く側でした。この他に12月と3月に合宿があった訳です。こうして挙げてみると意外と多く、レジャースキーしか知らな



2006.01.21 よませスキー場にて築地貴之（中央、H2卒）、後輩門上浩慈（左H3卒）と。筆者は右

い両親を説得してもやりくりが大変で、板やウェアなどの個人装備は半分以上が仲間達から譲ってもらったり、借りたりしてなんとか揃えていました。おかげで、自分で購入できるようになってからは、笑ってしまうくらい歯止めが効きづらく、苦勞しています。現役時代は合宿の引率は主に音海先生で、その延長で大学時代も妙高での合宿にも参加して、後輩達との交流も持たせてもらいました。

3年になり部活は引退しましたが、競技スキーのおもしろさにどっぷりとつかり始めたこともあって、大学受験では雪国・盛岡の岩手医科大学歯学部を受験し、進路と趣味には偶然の好環境で必然としてスキー部に入部します。翌年には獨協で1年後輩の門上浩慈と盛岡で再会、その後も長く関わることになります。進級と予算の許す限りではありましたが、在学6年間、スキーを続けることができました。毎年3月の全国歯科学学生体育大会（全歯体）では、さすが獨協と言うべきでしょうが、二つ上に田中公文先輩（東京歯科大学）、一つ上に池田賢一先輩（日本大学）、前述の門上、3つ下の豊田一郎君（神奈川歯科大学）と、さながら同窓会、レース前の挑発合戦などの風景がよく見られたものです。特に豊田君はキャプテンの時に、全歯体の主管を見事に努め（残念ながら私は卒業してしまいましたが…）誇らしげに思ったものです。また、田中先輩は卒業後も歯科医師として研鑽を積まれる傍ら、アメリカのプロツアーに転戦されたり、神奈川スキー連盟に深く関わられたりとご活躍されています。

大学卒業後は1996年に歯科医師国家試験に無事合格し、東京歯科大学歯科麻酔学講座に入局します。すると、卒直後の忙しさも手伝って、スキーは20代後

半の5年間はblankとなります。大学院、医科麻酔科研修が終わり、2001年に大学から離れると、待ちかまえていたかのように10年越えのつきあい、門上が「東京都スキー連盟に加入して公認レースに出よう」と持ちかけてきました。断る理由も無く、飛びつくと、新しいスキー板と技術に苦戦しながら、公認レースや、草レースにエントリーして、復帰していきました。再びスキー場に出るようになると、やはり、退屈しません。昔から獨協スキー部でホームグラウンドにしていた野辺山スキー場では現役スキー部の合宿に鉢合わせし、当時顧問の久保田先生とお話をさせていただいたり、歯科診療でお世話になっていた藤岡政嗣先生のご子息が現役の部員だったことに驚いたり、不思議な縁を感じたモノです。レース会場では東京都のレースで同級生の築地貴之だったり、面識はなかったものの後輩の谷雅則（H7卒）君も活躍していたりと、雪の上ではスキー部はそこかしこにいるようです。

最後に私の仕事にも触れてみたいと思います。前述の後輩、門上浩慈と2006年に西新宿で歯科診療室新宿NSを開業し、公私ともに合流しました。そんな訳でかれこれ24年のつきあいになってしまいました。その間、それぞれの結婚式のスピーチと二次会幹事をお互い努め、なんとか今年もスキーを続けることができました。昨年には彼を始め、様々な方面からのバックアップのもと、日本歯科麻酔学会専門医に認定され、多くの歯科医院の全身管理のお手伝いもさせていただいています。こうしてふりかえると、これまでの半生にとぎれなく関わり、大きなウェイトを占めてくる獨協スキー部の3年間は私の原点と言え、特別な道標たり得た場所でありました。

## 柔道部OB会ご紹介

クラブOBだより

昭和55年卒 高田正道

### ◎ 柔道部の沿革

獨協中学・高等学校に存在する数ある学友会活動（クラブ活動）の中でも柔道部は最も歴史のある部として今日に至っております。

その歴史は1883年（明治16年）の獨逸学協会学校としての開学まで遡ると思われませんが、丁度その頃は現在の柔道（当時は柔術）を理論的に整理・体系付けた嘉納治五郎師範が講道館を設立した頃と重なります。（講道館の設立は1882年 明治15年5月）嘉納治五郎師範は特に、若者の精神・肉体の鍛錬に柔道は有効であるとの考えに拠り、早くから学校柔道の普及に邁進したそうです。獨逸学協会学校（以下、獨協と表記させていただきます。）と当時の講道館も現在の建っている場所とは、お互いに若干の違いはありますが、現在の文京区近辺に存在していた事は事実ですので、獨協の学生にも講道館の入門者が結構いたかも知れません。

明治期の獨協からの主な輩出者としては、講道館正面に建立している嘉納治五郎師範の銅像建立の発起人

の一人である新井源水氏（九段）、小内刈から大内刈への連絡技である「文鎮刈」の名手と謳われた山本昇氏（八段）を輩出しております。また、明治29年からは100名からの参加者があった当時の「柔道部大會」が開催されました。当大會は、部員同士の他に講道館、旧制一高、明治義會中学校との試合も行われていました。また、当時の講道館の重鎮でもありました横山作次郎、富田常次郎、永岡秀一の各先生を招いての「形」の演技も行われる程の大会でもありました。

明治後期から大正にかけて獨協中学・旧制一高を通じての名選手も数多く、旧制一高での柔道、剣道、野球、ボートで活躍していた殆どが獨協出身であったと聞きます。旧制一高とは現在の東京大学教養学部の前身であり、文武両道の最たる時代であったと言えます。また、この頃から開成中学との定期戦も始まり、一時の中断期があったものの現在に至るまで両校の文化祭において招待試合が実施されております。大正から昭和初期にかけては、講道館少年部師範の田島鉄次郎先生が柔道部の指導をされました。

昭和期に入り、次第に戦時色濃くなる中、稽古もままならない時代に突入。昭和20年8月に終戦を迎え、翌、昭和21年にはGHQの施策により、武道禁止令が発令されました。学校柔道も例外ではなく、獨協も柔道部始まって以来の危機が訪れました。昭和26年にこの武道禁止令が解除されるまで、学校柔道、及び柔道部は暗黒の時代を過ごすのであります。そして昭和27年には黒須銀吾先生(八段)、中本次雄先生(三段)のご尽力で柔道部の活動も再開されました。

昭和も48年には体育実技の授業でも柔道は取り入れられ、獨協柔道部OBでもある保健体育科の池田昌富先生(四段)が顧問として指導に当たられました。昭和52年4月からは池田昌富先生が合気道の海外指導の為日本を離れられる事になり、やはり獨協OBの萩野元祐先生(七段)が池田先生を引き継ぐ形で、獨協に正式に保健体育科の教諭として赴任されました。以来、今日に至るまで、30数年に亘り、本校の教諭、柔道部の顧問としてご指導を頂いております。

#### ◎ 現在の柔道部とOB会

現在の柔道部は中学・高校併せて6学年が一体となって活動しております。活動日は月曜～土曜の放課後、練習時間は約2時間です。土曜、日曜は地区の予選試合や親善試合等が実施される場合も多く、柔道に接する機会は結構多くなっています。しかし、勉強を優先してのクラブ活動であるという文武両道の考えから、練習への参加は強制ではなく、生徒の自主性に委ねられております。日々の練習には顧問の萩野元祐先生の立会い、指導の下、行われています。また、各行事、試合等の引率にはドイツ語科の熊田修二先生も携われ、助言を頂いております。

部員は中学・高校合わせて15名が在籍し活動しております。現在は重量級が少なく、軽・中量級の部員が多い傾向にあります。後輩は先輩部員のことを慕い、先輩は後輩部員のことをよく面倒をみております。練習内容は萩野先生の指導のもと、柔道のみではなく、陸上、野球、器械運動、相撲、合気道など他種目の長所をトレーニングに採り入れて身体能力の向上に努めております。

文武両道がクラブの基本方針でありますので、勉強にも力を入れております。具体的にはOB会ともタイアップして現役大学生OBを招いての英語、数学等の勉強会の実施、合宿でのOB指導による夜間勉強会実施、等々があります。それらの施策の結果、近年では国公立や私立の有名大学に進学する部員もかなり輩出してあります。また、就職においても、大企業、優良企業に就職する学生も多く、獨協ならではの医歯薬系の大学にも進学者が数多くおります。最近の部員を見ていると、やはり目的意識を持った生徒が勉強やクラブも頑張り、自分の目標の進学先、就職先へ進む傾向が強いです。これらの結果を見ていると、勉強とクラブの両立は可能であると、はっきり断言できます。柔道としての目標は支部大会、区大会に於いてベスト8以内、都大会への出場です。昭和末期から平成にかけては都大会で上位入賞者も数名輩出しており、支部

でも一目置かれた存在でもありました。大学入学後も柔道続ける学生も多く、特に、医歯薬系の大会での柔道競技部門で6連覇するOBも輩出する等、内外からも注目をされています。

遠征稽古、合宿、交流試合等も盛んに実施されていて、合宿は必ず毎年夏休み期間中、東京を離れて関東近辺で実施されています。直近の、昨年の夏合宿は東日本大震災の影響で以前から利用していた群馬県の施設が被災した関係で変更になりましたが、概ね同一箇所でも何年間も続けて実施する傾向にあります。OB会も夏合宿には全面協力し、物資、金銭の援助をはじめ、現役に胸を貸し、共に汗を流しています。交流試合も定期的実施されていて、特に開成学園との定期親善試合は一時中断はあったものの明治期より両校の間で連綿と続いてきた伝統行事です。現在ではお互いの学校の文化祭にて招待試合という形で、交流させていただいております。戦績はその年によっても違いますが、概ね、中学では開成有利ですが、高校では獨協有利の状態がここ数年来の傾向であります。また、12月の稽古納めには毎年、現役生対OBによる試合が実施されています。この試合に向け、日々練習に励んでいるOBもいるほどです。現在は部内だけの規模になりましたが、校内柔道大会も既に50数年間欠かさず続けられている大会です。OB会としては、会長派遣、及び若手OBによる試合審判の協力等、お手伝いさせていただいております。3月実施の高校3年生送別会では卒業生の保護者様もお呼びして現役生VS卒業生の送別試合も実施され、OB共々参加して、卒業生を盛り立てて送り出しております。

現在、OB会長は昭和53年卒業の鈴木成之氏が務めております。戦後のOBは230有余名を数え、医歯薬関係をはじめ、企業経営者、公務員等、多岐の産業に亘って活躍中であります。

OB会の会員は主に昭和30年代以降に卒業した生徒の構成によっておりますが、戦後の混乱期中断はあったものの、部の創立は戦前ですので、当時のOBも必ずいらっしゃる事は紛れもない事実です。しかし、武道禁止令等の混乱によって現存する資料もごく少なく、当時の部員でいらしたOBを探すのも至難の業であります。現在、OB会ホームページをはじめ、同窓会の力もお借りして情報を収集しておりますが、この紙面をお借りしても是非、戦前～戦中～戦後の柔道部周辺の事をご存じの方の消息が判れば望外の喜びでございます。

卒業後、30数年を経た今でも、母校、獨協に気軽に立ち寄れるのも柔道部に在籍し、楽しみや苦しみの中にも目標を見出してやってきた証だと思っております。今、まがりなりにも社会人として生き、仕事や家庭で己の確固たるものを育ててこられたのも偏に「柔道」、そして「獨協柔道部」の存在があったればこそであると確信しております。これからも「柔道」、及び「獨協柔道部」のお役に立てるように努力し、己を高めるために柔道と関わり、精進していきたいと思っております。

# ドイツ語人生

昭和46年卒 大沼伸一

私が独協高校へ入学した理由は、当時中学校の教師をしていた叔父に薦められてのことです。当時の友人に話すと、「あの学校には自転車部がある」、というので、即座に心の中では、「独協以外に行くところなし」、と決めていました。また、同時にドイツ語教育へ力を入れている、ということも知り、決して英語が嫌いなのではなかった私が、「じゃ、ドイツ語をやるう」、と入ったのが新独組です。

未知の物に出会うような期待での最初のドイツ語授業では、「デア、デス、デム、デン」。理屈なしに覚える、というのは今も昔も苦痛であり、「定冠詞、不定冠詞、単数、複数」の使い分けは、日本語に相当するものが無いため、理解に苦しみました。というか、理解するのではなく、そういうものだ、と（私の大嫌いな）暗記をさせられました。その後、このドイツ語の授業で理解できなかったことが、自分の一生に付きまとうとは思ってもありませんでした。高校3年間、そして大学の第一外国語での2年間に、ドイツ語を能動的な勉強としてではなく、受動的に習いましたが、試験で落ちなかった事は、決して自分がドイツ語を理解していたわけではありません。

後に、私は第一次オイルショックのしわ寄せで就職先が決まらなかったこともあり、既に旅行で行った事のあるドイツへ行くことになります。決して勉学に励む、というようなすばらしい動機ではありません。それでも、ドイツへ来て生まれて初めて、真剣に毎日ドイツ語を勉強し始めました。労働許可が無かったため、闇でホテルの仕事やレストランの給仕をしながら、語学学校の出席率は低くても、常に独和辞書を身から外すことなく、何度調べても忘れる単語の見出し語の下には鉛筆で下線を引き、さらにその端には検索回数を示すために「正...」の文字が複数並ぶこともあり、2年間語学学校へ通い、引き続いてミュンヘン大学の言語学科へ入学し言語学を専門とし、副科で近代ドイツ文学と心理学を勉強し、1980年中頃にMagister（日本の修士に相当）を取得することになります。苦勞しましたが、充実した大学生活でした。

ドイツでの生活では、初日から生活費はどこからももらっていませんでしたので、前述したホテル、レストラン以外にピラ配りをやったりもしました。

日常語としては、ドイツに来た当初は英語を使っていましたが、半年くらい経った頃から、ドイツ語の方がましになり、2年半くらいたった頃に、縁あって通訳を頼まれ、今でもよく覚えています。BMWのミュンヘン工場で日本から来た団体の通訳をやりました。今思えば、よくやったな、と冷や汗ものです。

その後、大学へ通う傍ら、通訳・観光ガイド等、収入につながる事は何でも断らず、やってきました。

ミュンヘン大学を卒業した後は、一時、日本の会社の契約社員としてゴム会社のヨーロッパでの市場調査をやっていましたが、約20年弱前からは、通訳が売り上げの殆どを占め、15年くらい前からは殆ど同時

通訳専門で仕事をしています。少々専門的な話になりますが、まれに逐次通訳をすると、自分の短期記憶能力が鈍っているのが気になります。つまり同時通訳では、超短期記憶能力しか使わないからです。この仕事は国内外を問わず文字通り舞台裏の仕事で（小さなキャビンに入ってモニターを見ながら仕事します）、社会的に評価されていないのが現状ですが、ハードな仕事です。瞬時に入ってくる情報（言葉）を正確に理解し、話者の意図に忠実に転換（翻訳）する同時通訳の仕事では、恐ろしい程の集中力とスピードがなければやっていけません。高回転のエンジンでもバルブがピストンのスピードについていなければだめなのと同じです。いつか自分の情報処理スピードが落ちてきたら、リタイヤする時です。

私は新独組で糸井先生に「デア・デス・デム・デン」を教えられましたが、ドイツ語で生きている現在でも、未だに定冠詞・不定冠詞・単数・複数の使い方は分からないことばかりです。これは本能的なもので、妥当性という輪郭の不明確な感覚の世界です。その言葉の環境で育たないと、一生理解することはできないでしょう。他方、横山先生に買わされたドストイェフスキーの「罪と罰」のドイツ語版は、当時仕方なく、読まされ、何も理解していませんでしたが、数十年後に日本の家にあったこの本を手に取り、ドイツへ持ち帰り、読み出し、ドストイェフスキーの奥深さ・恐るべき才能に驚嘆し、大ファンになりました。横山先生のおかげです。

私は既に人生の半分以上をドイツ語環境で過ごしていますが、30年以上前にドイツへ着いた時はわずか11Kgの荷物だけでしたが、現在はミュンヘン郊外に家を建て、家族4人で生活しています。

## 第5代獨協学園同窓会会長鈴木浩先生 百歳を記念してお祝い致しました。

昭和28年卒 佐藤明德

我らの大先輩・昭和4年独逸学協会中学校卒業鈴木浩元同窓会会長の百歳をお祝いするに当たり、去る平成24年1月25日の吉日を選び同窓会より記念品とお祝い金を持参してまいりました。

鈴木浩先生は天野貞祐会長の補佐役を経て昭和55年4月から平成9年6月まで次期会長菅野朗先生に代わるまでの17年間を同窓会会長としてご尽力されました。

今年は例年になく厳しい寒さの続く毎日、浩先生は浩生会スズキ病院の特別室に大事をとって休んでおられました。ご子息浩之院長の同伴にて、ご本人の喜ぶ顔を写真に取らせて頂き、顔の艶も目の輝きも百歳とは思えぬほどの穏やかさでありました。

## 私の近況 卒業 10年

●会社の経営から75歳で引退。その後は競争社会から離れ、心身ともに平穏無事の日常生活となりました。若年時より健康第一を考え不惑を過ぎたころからアスレチックジムへ、今でも週2回のペース。お蔭様で米寿を迎えることが出来ました。

(昭和17年卒 山田武磨)

●獨協時代の思い出中学時代はバスケット、高校時代はテニスと勉強よりもスポーツに専念していたように思います。今もその時の仲間と会合を持っています。また、年に一度の同級会には大久間先生が今でも出席なさっていただいています。現在は旅行ゴルフを楽しんでいます。

(昭和27年卒 朝比奈貴次)

●おかげ様で健康です。太り気味なので、昨年12月から日常の飯も酒も半分に減らし2月末現在5%軽くなりましたが、まだまだと頑張っています。2010年から同窓会に出席を心がけています。懇親会の最後に老若一同で唱える校歌は、我が心も青春時代、格別な感激を得ます。齢78歳孫4人、4月に同期独逸語組の6人で一泊旅行会を計画準備中です。

(昭和27年卒 筒井昭)

●スポーツクラブ通い・10000歩ウォーキング、又時には、気分転換にカメラをお供に公園・散策・軽いハイキング等、もっぱら運動主体の健康的な生活をしています。

(昭和27年卒 宮本龍一)

●卒業から50年、現在3保育園の事務長として経営に携わっています。母校も10年くらい行っていません。何せ奈良県在住のため、なかなか行けません。ぜひ次回の総会には出席したいです。

(昭和37年卒 宇都見忠)

●去る1月17日、研究会が獨協大学であり、先年竣工した天野貞祐記念会館に初めて入り、新井孝重資料センター所長らの案内で天野先生の書斎を復元した部屋など、資料を含めて見学した。額に入った先生のご尊顔を拝し、先生にクラスの面々と共にしかられた日々のことが懐かしく思い出された。先生は「あなた

方の親から君たちを私は預かっている。もっとしっかりしろ。」とおっしゃられたと記憶している。朝礼で述べられた「日々新たに…」の言葉が、カントの名前とともに耳に残る。

(昭和37年卒 益井邦夫)

●息子もお世話になり(埼玉)また同窓で同業の先輩、後輩に恵まれて(遊び、仕事両方で)町の歯医者やっています。当時の獨協の話をしてしていると懐かしくなります。小林ベーカリーのパンが食べたいです。

(昭和47年 田中栄一郎)

●今年は、卒後節目の40年目に当たります。当時、獨協医大が出来る頃で、私は帝京大学医学部卒ですが、時代の変わり目の卒業生です。今は親の跡を継ぎさいたま市で開業しています。医者とはいえ、医療経営もなかなか大変です。

(昭和47年卒 箕田進)

●日曜を除く毎日、好きな内視鏡を計6ヶ所の病院を渡り歩いて行い、非正規雇用者ながらもなんとか屋根のある家に暮らしています。たまにテレビにも出てます。獨協医科大学卒でもあるので、獨協へは足を向けて寝れません。

(昭和47年卒 森一博)

●卒業後30年経ってしまいました。時々、東京や埼玉で同級生数名と酒を酌み交わしています。目白で過ごした数年が精神の礎となっています。

(昭和57年卒 鈴木英彦)

●船橋市の病院で糖尿病を中心に診療しております。最近、獨協の同期と集まる機会が増えました。また年に20回ほどの演奏会通いも、何とか仕事と折り合いをつけて続けています。(昭和57年卒 木下潤一朗)

●1976年4月、中学1年生でドイツ語を学び始めました。あれから36年経った今現在、大阪学院大学でドイツ語を教えています。柴田先生、前田先生、合田先生に教えてもらった6年間がその礎です!

(昭和57年卒 神谷善弘)

●大学人事にて、地域医療に貢献中。

(平成4年卒 加藤順一郎)

## クラス会だより

### 昭和19年卒 獨協五三会

平成23年11月19日、閑静東中野駅前の日本閣で開催しました。

分かる範囲内で全国の旧友28名に電話をかけ、新潟県から斎藤讓治君が駆け付けてくれました。出席者は12名で、今回は尾島昭彦君付き添いの娘さん、小乙女幸(元宝塚歌劇団雪組)も参加、「すみれの花」など昔懐かしい歌をCDの伴奏付きで聞かせてくれました。話題は、獨協の先生方は今も昔も一流であること。没収された先生のあだ名一覧表が教員室で披露されたところ、その適格性に大笑いになったそうだという話。あだ名とは先生に対する親愛の情を表すものであり、むしろ愛称というのが正しい、など懐旧談に花



が咲きました。

次回はさらに連絡網を広げ、一人でも多くの諸君に出席してほしいものと考えています。

(石澤和夫・原 和夫)

## 昭和 34 年卒 3 年 2 組 辰巳会

昭和 34 年卒 3 年 2 組のクラス会（辰巳会 恩師は故神田直人先生）を 10 月 23 日八重洲富士屋ホテルで開催しました。

今年の辰巳会は 2 組だけでなく、他クラスからも出席希望もあり、22 名の出席となり、乾杯の音頭は東洋大学を定年で退職した駒井君の発声で始まりました。

34 年卒は各クラス別の恒常的な集まりが無く、辰巳会のみが毎年開催していることから、次第に他クラスからの参加者も増え、和気あいあいの雰囲気の中、仲間の近況、今後の体調管理など年齢を感じさせる話題も含め大盛況となり、最後に出席者全員で記念写真を撮影し、来年の再開を期して散会となりました。

昨年継続となった同期会は今後も「絆の会」として毎年 2 回開催する事になりました。34 年卒で「絆の会」出席希望の方は是非幹事までご連絡下さい。連絡先は獨協通信事務局へお願い致します。（幹事：原 鉄一）



## 昭和 37 年卒 獨協 37 会

平成 24 年 1 月 25 日 銀座ニュートーキョウ“桃杏楼”にて昭和 37 年卒の有志一同で同期会を開催致しました。



始めに昨年亡くなられた一年後輩の合田先生、同期の永井義之君を偲び全員で黙祷をし、お二人のご冥福を祈りました。

参加者は 22 名で本年は我々が卒業して以来 50 年という意義深い年であり、昔話やら楽しいスピーチで昔の学生時代を語り合い楽しいひと時があったという間に過ぎました。

来年は我々も古稀を迎える為、仲間を誘い合い 50 名の会を開催しようと約束し校歌を斉唱し、散会致しました。

写真は前列左より 橋本設夫、田中聰、山本康雄、葛和建巳、住友史人、上仲猛親、木村（星）聡、矢部素男、金田正、佐藤久信、松本匡史（天童大人）、小川高明、古菅君夫、斉藤昇一、鈴木一郎（敬称略）

（世話役：住友史人・橋本設夫）

## 昭和 38 年卒 英語クラス同期会

恒例の 38 年卒英語クラス同期会が、2 月 25 日、今年の寒さ故にやや開花の遅れた梅の花に囲まれて、上野公園内「韻松亭」にて開催された。親の介護と風邪で出席出来なかった人を除いて 7 名が集う。昨年 3 月 11 日の行動と近況が厳しい表情のもと語られた。社員や患者さんへの安全を優先配慮した人、出張が半日ずれて難を逃れた人、新宿末広亭で遭遇した人など、さまざまな生活パターンのあり様を共感した。また、最近の投資顧問会社の存在や政治などへの怒りにも話題が盛り上がった。高校時代を思い出す雰囲気が現在でも活力ある姿と重なって見えたものです。暗闇に映える公園内ぼんぼりに囲まれながら散会した。

（辻 定利・記）



## 志村会

12 月 20 日（火）今年で三回目（早いものだ）の志村会が池袋で開かれた。幹事のうっかりで平日ど真ん中に会を開いてしまい、連絡を取ると案の定出席の

連絡は例年に比べ少なかった。三回目にして初めて出席者数一桁になってしまうのかと懸念していたが蓋を開けてみると先生を含め13名の大盛況だった。当初欠席の連絡をした友人にどうして出席出来たのか事情を聞くと、ある友人は鎌倉からがんばって駆け付けてくれたり、ある友人は会の翌日に休みをとって参加したなど。幹事として本当に嬉しいことだった。これからも毎年クラス会を開くつもりなので是非とも参加して欲しい。大いに笑い大いに飲み、一緒に歳を重ねていこう。それはきっとこれ以上ないほどに愉快で幸せなことだと思うのだ。(幹事：吉川・木田)



## 獨協中学・高等学校PTAより「獨協祭・バザー用品ご寄付のお願い」

PTA会長 鈴木 一郎

昨年は、多くの同窓生の皆様より獨協祭・バザーにご協力いただきまして誠に有り難うございました。おかげさまで例年以上の収益金が増えることができ、子供たちに還元することができました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。昨年度は、生徒会の東日本大震災復興支援活動に賛同し、宮城県南三陸町にコンテナハウス図書館2台を寄贈する際、収益金の一部を寄付させていただきました。

さて、今年も9月22日(土)・9月23日(日)の日程にて、獨協祭が開催されます。

PTAでは昨年に引き続き、同窓生の皆様に獨協祭に参加していただき、更にバザー用品のご寄付ならびにご提供もお願いしたいと考えております。

バザーの収益金は、学校の施設改善費の一部ならびに学友会への補助金としてクラブ活動等の活性化に役立てられております。皆様には、後輩である在校生のために、まだお手元に眠っているお品物がございましたら、下記要領をご参照のうえ、ご提供下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

また、獨協祭ならびにバザーにも、ぜひ一度遊びにいらしてください。在校生、PTA委員一同、心よりお待ちしております。

### 記

#### 1. バザー用品受付期間とご提供の方法

- ・9月1日(土)～9月21日(金)
- ・宅急便にて下記迄お送りください。(元払いでお願い致します)  
〒112-0014 文京区関口3-8-1 獨協中学・高等学校「PTA厚生委員会」  
TEL 03-3943-3651
- ・直接学校へご持参いただく場合は、主事室前廊下で受付しております。
- \*お問い合わせ先 事務・淀縄(よどなわ)まで  
(ロックアウト期間中の8月を除く)

#### 2. ご提供品について

- ・新品もしくは未使用のものをお願い致します。
- ・会社名などが入っているもの、試供品・景品・粗品などはご遠慮ください。
- ・食品は賞味期限に余裕のあるもの、未開封のものをお願い致します。  
(未開封のものをお願い致します。また、手作りのお菓子は焼き菓子に限らせていただきます。)
- ・手作り品は材料費を明記してください。

◆ 188 名を送りだす 獨協高等学校卒業式

第 64 回獨協高等学校卒業証書授与式が 3 月 10 日、寺野彰理事長、ドイツ大使館文化部長ダーヴィット・バウムゲルトナー氏、山田恒久獨協大学副学長、永井伸一前校長、新井嘉昭後援会副会長、新井雅安 PTA 会長、鈴木荘太郎同窓会長らの臨席のもと 100 周年記念体育館で行われた。

渡邊和雄校長は式辞の中で「自分の夢を実現できるように社会に貢献できるように 自信を持って前に進んでほしい。また、多くの人を幸せに導けるように自分のできることをやりつくす。人事を尽くして天命を待つ」と語りかけた。

また、永井伸一前校長も卒業生に対し「現状を認識してさらに良くしていきましょう」と語られた。

鈴木会長からは卒業生全員に卒業記念品としてボールペンとペーパーウェイトが贈られた。

◆ 210 名の新入生 獨協中学校入学式

平成 24 年度の獨協中学校入学式が 4 月 6 日に行われた。渡邊和雄校長は式辞の中で「新たな時代を迎えるに当たって、自分の希望を叶えるだけでなく、他の人々や次の時代の人々の幸せを叶えるよう、大きな志を持ってもらいたい」と呼びかけた。新入生を代表して奥墨紘太君の希望あふれる宣誓があった。

◆ 獨協中学・高等学校人事

退任 大塚 智 詩 (英語科)

新任 川 辺 瑠衣子 (英語科)



平成 24 年度大学別合格者数 (推薦者を含む延べ人数・平成 24 年 4 月 9 日現在) 進路指導部

＜国公立大学＞	久留米大学	1	玉川大学	10	明星大学	5	
東京大学	1	昭和大学	3	多摩美術大学	2	桃山学院大学	1
滋賀医科大学	1	聖マリアンナ医科大学	2	千葉工業大学	13	横浜薬科大学	1
東京芸術大学	1	東京医科大学	1	鶴見大学	5	酪農学園大学	1
東京海洋大学	2	東邦大学	5	帝京大学	9	立正大学	2
筑波大学	1	日本大学	32	帝京科学大学	1	立命館大学	2
横浜国立大学	1	麻布大学	1	帝京平成大学	1	和光大学	4
埼玉大学	1	亜細亜大学	2	東海大学	19	小計	489
信州大学	1	大阪学院大学	4	東京経済大学	2	＜海外大学＞	
香川大学	1	大阪産業大学	4	東京工科大学	5	Hunter College	1
首都大学東京大学	1	神奈川大学	7	東京工芸大学	1	University at Buffalo	1
静岡県立大学	1	金沢工業大学	2	東京歯科大学	1	University Minnesota	1
小計	12	関西大学	5	東京電機大学	18	小計	3
＜私立大学＞		関西学院大学	2	東京都市大学	7	＜専門学校＞	
獨協大学	19	関東学院大学	2	東京農業大学	4	H A L 東京専門学校	1
獨協医科大学	1	北里大学	5	東京福祉大学	1	音響芸術専門学校	1
慶應義塾大学	8	近畿大学	1	同志社大学	1	東京バイオテクノロジー 専門学校	1
早稲田大学	7	工学院大学	5	東北芸術工科大学	1	小計	3
上智大学	11	神戸学院大学	2	東洋大学	18	＜就職＞	
東京理科大学	15	國學院大学	11	二松学舎大学	2	就職	1
青山学院大学	12	国際武道大学	1	日本歯科大学	8	小計	1
学習院大学	17	国土舘大学	2	日本社会事業大学	1	合計	508
中央大学	8	駒澤大学	10	日本文化大学	1		
法政大学	19	芝浦工業大学	18	弘前学院大学	1		
明治大学	19	成蹊大学	8	星薬科大学	1		
立教大学	13	成城大学	6	北海道医療大学	1		
岩手医科大学	1	専修大学	13	武蔵大学	6		
金沢医科大学	1	大正大学	1	武蔵野美術大学	2		
杏林大学	2	大東文化大学	6	明海大学	4		
		拓殖大学	8	明治学院大学	4		

## 図書館だより

同窓会からのご寄付は、特にシリーズ物をまとめて購入する際に活用させていただいています。たとえば、平成 22 年度に購入いたしましたポプラ社の百年文庫は、古今東西の有名作家の短編小説を一冊に三編ずつまとめ、かつ一冊ごとに漢字一文字の表題を与えるなど、工夫を凝らしたシリーズとなっていて、この中の一冊をきっかけに、生徒が好きな作家を発見し、より深い読書へ進んでくれればという期待をこめて選びました。

最近 4 年間に同窓会からの寄付で購入した図書の一部を表にしました。また、写真はポプラ社の百年文庫です。



同窓会からの寄付金で購入した蔵書の一例

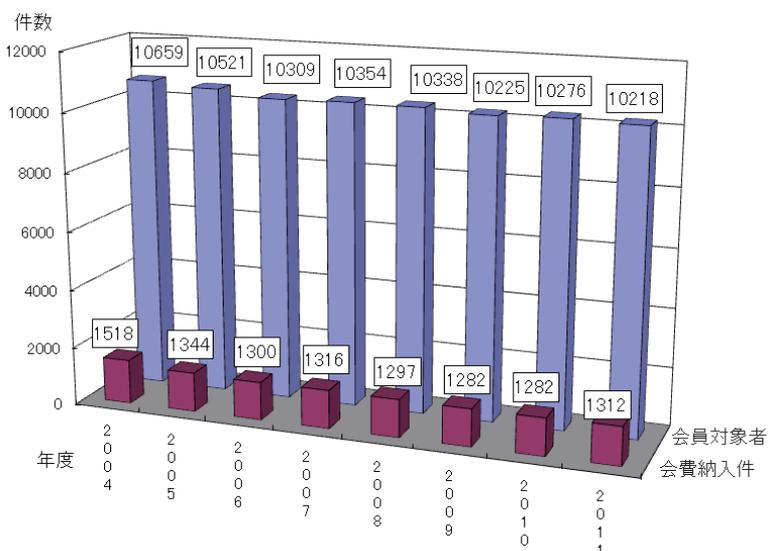
平成 20 年度	ルネサンス美術館	石鍋真澄 監修	小学館
	ヨーロッパの中のドイツ 1800～2002	W・D・グルーナー著	ミネルヴァ書房
	黒死病 ペストの中世史	J・ケリー著	中央公論新社
	フンボルト 地球学の開祖	D・ボッティング著	東洋書林
	レオナルド・ダ・ヴィンチ 藝術と発明 1 飛翔篇 2 機械篇	D・ラウレンツァ著	東洋書林
平成 21 年度	函解 ヨーロッパ中世文化誌百貨 上・下	R・バートレット編	原書房
	大和の古寺 1～7 巻		岩波書店
	日本・ポーランド関係史	E・P=ルトコフスカ/A・T・ロメル 著	彩流社
平成 22 年度	沙漠の事典	日本沙漠学会 編	丸善
	百年文庫 第 1 回配本 50 巻		ポプラ社
	永遠の詩 全 8 巻 (金子みすゞ、茨木のり子、山之口貳、中原中也、石垣りん、宮沢賢治、萩原朔太郎、八木重吉)		小学館
	ダ・ヴィンチ 藝術と科学の生涯	H・アータレイ、K・ワムズリー 著	日経 B P 出版
平成 23 年度	森の音がきこえますか 生物多様性・消えゆくものたちの叫び	藤原幸一写真・文	P H P 研究所
	コレクション日本歌人選 20 巻 (柿本人麻呂、山上憶良、小野小町...)		笠間書院
	サイエンス大図鑑 SCIENCE	A・H=デーヴィス著	河出書房新社
	写真集関東大震災	北原糸子編	吉川弘文館
	19 世紀ドイツの軍隊・国家・社会	R・プレーヴェ著	創元社

## 平成 23 年度 会費納入にご協力をありがとうございました

お陰様で、平成 22 年度 (1,282 件 = 6,410 千円) に比べ、平成 23 年度は 30 件の増加 (1,312 件 = 6,560 千円) となりました。

平成 22 年度に発行しました独協通信 74 号において、会費の納付が年々右肩下がりに減少傾向にある現状を鑑みて、「年会費納付のお願い」という記事を掲載いたしました。そして、会費納付方法について、「口座自動振替」と「郵便局振込」に加え、便宜性を考慮して「コンビニ収納」方法を導入したことをご報告いたしました。「コンビニ収納」方法のメリットの一つに、コンビニ振込用紙に記載されている振込期日を過ぎても、ゆうちょ銀行又は郵便局・その他金融機関において、この用紙を使用して振込ができることが挙げられます。

平成 23 年度の結果は、このような「コンビニ収納」の便宜性が功を奏した所以ではなからうかと推察いたしております。会員皆様のご理解とご厚意により、右肩下がり傾向に歯止めをすることができました。この継続が、当会の運営をスムーズに



する原動力になることに繋がると信じております。  
皆様のご協力・ご支援に心より感謝いたします。また、今後とも、宜しく願いいたします。

平成 24 年度  
**獨協祭が開催されます**  
**9月 22日(土)~ 23日(日)**



本年も昨年同様に同窓会の企画展示が計画されています。創立者の一員としての品川弥次郎とドイツ語教師としてまた校長として一時代を築いた大村仁太郎を中心に展示を計画しています。例年多くの同窓生および在校生さらには本校を受験しようとしている小学生、その保護者の方々など見学されています。また、同窓会の企画展示に当たっては同窓生の協力も不可欠です。例年有志の方々がお手伝いくださりますが、まだまだ人手不足は否めません。ぜひとも多くの同窓生がお手伝いくださいますよう同窓会役員一同お願い申し上げます。母校の様々な側面を垣間見るチャンスともなりますので重ねてお手伝いをお願い申し上げます。

**物故者名簿** (『独協通信』76号以降) ご冥福をお祈り申し上げます

卒業年	氏名	物故年月日	昭和 20	昭和 20	昭和 20	昭和 35	昭和 35	昭和 35	昭和 35
昭和 2	高野 元	H.23.4.15	柴田 普	H.22.12.11	昭和 35	松下 豊士	詳細不明		
昭和 8	山崎 眞弘	H.21.11.28	水田 昂	H.23.8.13	昭和 36	中村 博通	H.23.10.29		
昭和 10	吉澤 忠義	H.23.1.28	昭和 20	陳 以文	H.24.1.17	昭和 37	今泉 正雄	H.23.4.24	
昭和 11	関戸 喜代志	H.22.2.3	昭和 20	釜江 正春	H.23.9.21	昭和 37	竹井 征二	詳細不明	
昭和 12	柴崎 辰三	詳細不明	昭和 20(5)	尾崎 周三	H.23.7.15	昭和 37	藤井 勝	H.20.7 月	
昭和 13	織田 文二	H.22.11.23	昭和 20	小林 禮次郎	H.23.8.13	昭和 37	加藤 悦宏	H.20.10 月	
昭和 15	月江 富治郎	H.22.12.12	昭和 21	松浦 豊明	H.23.8 月	昭和 37	富山 学人	H.20.12 月	
昭和 17	安藤 能久	H.23.1.16	昭和 22	中村 一雄	H.23.1.15	昭和 37	長浜 友夫	H.23.1 月	
昭和 17	山崎 和英	H.24.2.5	昭和 22	高野 実	H.23.8.24	昭和 37	笠井 健一	詳細不明	
昭和 17	宮舘 勇三	H.22.6.30	昭和 23	戸倉 康男	H.20.10.19	昭和 37	永井 義之	詳細不明	
昭和 18	笹目 邦夫	詳細不明	昭和 23	一ツ子 邦泰	詳細不明	昭和 37	小川 博久	詳細不明	
昭和 18	小倉 諭治	H.17.5.3	昭和 25	高橋 敏三	H.23.7.3	昭和 38	合田 憲	H.23.5.3	
昭和 18	窪田 三郎	H.22.1.28	昭和 25	菅原 祐紀	H.23.2.12	昭和 38	三塚 勇	詳細不明	
昭和 18	能勢 充	H.21.6.2	昭和 26	伊與田 弘	H.23.1.1	昭和 41	坂井 格	H.23.11.12	
昭和 19	廣瀬 脩己	H.22.7.12	昭和 26	雨宮 重夫	H.22.6.15	昭和 43	渡部 敏明	H.23.9.21	
昭和 19	斉藤 英夫	詳細不明	昭和 26	駒井 信明	H.23.4.6	昭和 45	高田 明彦	H.20.6.27	
昭和 19	押小路 忠雄	H.24.2.15	昭和 27	永沼次郎	H.23.6.16	昭和 46	岡部 俊一	H.22.12.16	
昭和 20	吉田 豊	H.22.11.15	昭和 28	木村 泰包	H.23.5.21	昭和 47	斉藤 治伸	詳細不明	
昭和 20	川北 登	H.21.10.6	昭和 28	堀川 辰夫	H.23.4	昭和 48	勅使河原 直樹	H.17.9.23	
昭和 20	堀 福次郎	詳細不明	昭和 28	坂本 治	H.23.10.23	昭和 49	八丁 敏郎	詳細不明	
昭和 20	長江 喜儀	H.22.10.19	昭和 29	佐藤 矩男	H.23.11.3	昭和 52	前田 基晴	詳細不明	
昭和 20	香田 康夫	H.3.7.26	昭和 30	野口 和三	詳細不明	昭和 54	遠藤 和郎	H.23.10.14	
昭和 20	河野 豊	H.22.9.2	昭和 31	成田 信昭	H.21.5.21	昭和 57	岩間 功	H.22.12.22	
昭和 20	山岸 重雄	H.22.5.1	昭和 34	植田 一朗	H.23.3.28	昭和 58	田川 裕二	H.22.2.24	
			昭和 34	小川 暢弘	H.23.7.12				
			昭和 34	溝口 浩	H.24.1.12				

**編 集 後 記**

本号では、多くの原稿が集まり、読みでのある号となったかと思えます。酒井先生の「日独交流史」では鎖国時代の欧州との交流が、オランダとの交流の制約の中多くのドイツ人がオランダ人として来日していたことなど紹介されており興味深いものです。学生時代のクラブ活動の中にはクラブのOB会として活動しているものも多くあり、この号ではスキー部、柔道部の活動をご紹介します。巻頭の「歯科医師獨協会が発足しました」にありますように同窓会の活動も卒後の業種団体や職域、地域での活動、クラブ活動のOB会活動など多彩な活動があります。こうした活動についても母体の同窓会が積極的に支援していくように努める時期が来ていると思われれます。また、現役の学生諸

君の様々な活動も紹介でき、現在の獨協の様子もお伝えできたかと思っております。

本号では増ページしたにもかかわらず、同窓生の近況やクラス会だよりの記事が少なくなりました。短い近況やクラス会だよりの記事が少なくなりましたが、様々な同窓生の活動がお知らせできる内容の濃い投稿原稿も楽しいものと考えています。編集委員が知恵を出し合い、これといったライターに原稿をご依頼することも多くなるかと思えます。その節はよろしく原稿のご執筆をお願いしたいと思います。同窓生の皆様方のご協力で「獨協通信」の紙面拡充に努めていきたいと考えております。重ねてご協力のほどお願い申し上げます。(竹文)